

日本大学文理学部における学校インターンシップの課題と展望 —聖パウロ学園高等学校での試行から—

土屋 弥生¹⁾

I はじめに

中央教育審議会（2015）による「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」には、学校インターンシップについて以下の記述がなされている。「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義である・・・」。以上の記述の通り、教職を目指す学生にとって、教育現場での経験を重ねる機会をもつことは重要なことであり、またそれは実践的指導力の育成に大きく寄与するであろうことが推察される。

しかし一方で、答申に見られる理念が既存の学校教育の現場で正しく理解されるか、またその実現に向けて学校教育現場が学生の受け入れについて前向きに動くことが期待できるかどうかについてはまた別の問題として扱われなければならないだろう。

教職課程の教育においては、「教職課程コアカリキュラム」（文部科学省，2017）による質的保証が求められることになり、教育実習のみならず、「学校体験活動」も取り上げられることとなった。「教職課程コアカリキュラム」の作成の背景には、学校現場の課題が複雑・多様化する中、教員養成

教育において、実践的指導力や課題への対応力の修得がより求められているということがある。

また、前述した答申（中央教育審議会，2015）の中では、教職課程の見直しのイメージが示され、それによれば、教育実践に関する科目の中の教育実習の単位数として「学校インターンシップ（学校体験活動）」を2単位含むことができるとされている。また、同答申には「既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図るとともに、その円滑かつ確実な実施に向けて、受入れ校の確保や実施内容の検討等のための教育委員会や学校と大学との連携体制の構築、大学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施、学生側と受入れ校側のニーズやメリットを把握するための情報提供の実施など、環境整備について今後十分に検討することが必要である。これらの点を踏まえ、学校インターンシップについては、各学校種の教職課程の実情等を踏まえ、各教職課程で一律に義務化するのではなく、各大学の判断により教職課程に位置付けられることとする」と記されている（中央教育審議会，2015）。「学校インターンシップ」による実践的指導力の養成には大きな期待が寄せられている反面、その実施についての環境整備の困難さも指摘されるところであろう。

本稿では、日本大学文理学部がこれまで取り組んできた「教職インターンシップ」、さらに平成29年度に実施した「学校インターンシップ」の試行について総括し、今後の「学校インターンシップ」の本格的な実施に向けての課題と展望について検討する。

1) 日本大学文理学部

II 文理学部のこれまでの取り組み —教職インターンシップ—

平成23年度から、文理学部では学部独自の取り組みとして「教職インターンシップ」をおこなってきた。これは、教職ボランティアなどとは異なり、教師に必要な実践的指導力のあり方を参加する学生自身が自覚できるように、内容とプログラムを設定し、受け入れ先の聖パウロ学園高等学校エンカレッジコースとの連携により実施している。大学担当者による事前指導・事後指導、受け入れ校の担当者による事前指導・事後指導およびインターンシップ後のリフレクション、学生と受け入れ校の担当者によるディスカッション・リフレクションなど、インターンシップで経験し、学んだことを学生自身が省察できるような工夫がなされている。平成23年から継続して実施しており、年間に数十名の教職を志望する学生が参加している。なお、教職インターンシップの詳細については、拙論（土屋, 2012, 2013）を参照されたい。

1 教職インターンシップの概要

1) 趣旨

教職インターンシップは、学生が将来、教師として教育現場で指導を成立させるために必要な力を、実際の教育現場において学ぶためのプログラムである。教師に必要な実践的指導力について、知識として知ることだけではなく、学校において実際に生徒の活動や授業での様子や、現場の教師が指導について考え、実践する様子を見ること、さらには実際に生徒指導をおこなうことを通して、身をもって教育活動の実際を知り、それをもとに教職について考える、いわば「知の身体化」の機会として提供される。このような目的を達成するために、教職インターンシップでは、大学のインターンシップ担当者、現場の担当者とおこなうリフレクションを通して、学生自身が何を学ぶことができたのかを認識し、大学で学ぶ教職に関する知識と実践の場で実感し体験した知を融合させ、教職に対する理解を深めることを目指す。

2) 目的

① 前期のインターンシップ

「生徒を見る力」を養成する。ここでいう「生徒を見る力」とは、教師が感性的共鳴によって生徒の状況の意味構造を読むことができるという現象学的解釈能力を意味している（土屋, 2017）。おもに生徒が身体を使っておこなう活動に参加することにより、生徒の特性・能力・資質・状況をとらえるということがどういうことなのかについて学ぶ。教育現場で指導を成立させるために必要な力がどんなものであるかに気づく。

② 後期のインターンシップ

前期のインターンシップをふまえ、各生徒にとって必要なこと・課題となることはどんなことなのか、さらに各々の生徒の直面する課題を生徒自身が乗り越えるために必要なことはどんなことなのかについて考え、教育現場における「適切な指導」のあり方について学ぶ。また、生徒指導を成立させるための教師と生徒の関係性の構築についても考え、教育現場で必要となる実践的な力について具体的に学ぶ。

3) プログラム

① 前期のインターンシップ

- 4月 大学の担当者によるガイダンス
- 5月 エントリーシートを提出, 参加者確定 (30名～70名)
受け入れ校担当者によるガイダンス
- 5月下旬～7月上旬
前期教職インターンシップの実施
・期間中に1名あたり2回おこなう
- 7月上旬
前期教職インターンシップのまとめ
・代表学生によるインターンシップで学んだことについての発表
・大学担当者と受け入れ校担当者による総括

② 後期のインターンシップ

- 10月 エントリーシートを提出, 参加者確定 (10名～20名)

- ・前期に教職インターンシップに参加した学生がエントリーできる
- 10月下旬～12月初旬
- 後期教職インターンシップの実施
- ・期間中に1名あたり2回おこなう
- 12月初旬 後期教職インターンシップのまとめ
- ・代表学生によるインターンシップで学んだことについての発表
 - ・大学担当者と受け入れ校担当者による総括

4) 教職インターンシップの内容

① 前期のインターンシップ

体育実技、農業体験の授業におけるインターンシップで、生徒の活動を見ることによって、生徒の動きや人間関係、会話の様子などから、生徒の特性などを洞察することを学ぶ。インターンシップ開始時には担当者から、インターンシップの目的や留意点、生徒の個別的な発達特性、家庭環境等の生徒を取り巻くさまざまな状況についての説明があり、終了時には約1時間半におよぶりフレクションが設定され、その日の活動の中で見られた生徒の様子について振り返りをおこなうとともに、活動や様子の意味についての解説がある。おもに身体性に着目して、生徒理解をおこなうことを経験する。また、その日の重点指導生徒や指導方針、指導の分担などについての話し合いをおこなう朝の職員会議の様子を参観し、教育現場でおこなわれる指導の在り方について学ぶ。1グループはメンターとなる担当者の教員が学習者一人ひとりの学びのレベルを考慮しながらリフレクションができることを企図して3名～5名程度とした。

② 後期のインターンシップ

前期のインターンシップの内容に加え、生徒に対する個別指導を行うことを通して、自らが教育現場において指導する立場に立つことで、教育活動における自分自身の課題を発見する。具体的な指導体験を通して、教師として生徒とどのように向き合うことができる

のか、また指導を成立させるためにはどんなことが課題となるのかについて考える機会を得る。生徒の家庭環境や保護者のあり方についても学び、生徒が育まれる環境の理解や教師と保護者との関係構築についても学ぶ。特に、不登校を経験している生徒や発達の課題が見られる生徒について、その特徴や指導の在り方を具体的な事例を通して学ぶ。前期と同様、担当者による説明、リフレクション、アドバイスがあり、学生自身が教師を目指すうえでの自らの課題に気づき、その後の学びに発展させることができるようになっていく。1グループは2名ないし3名。

2 成果と課題

教職インターンシップの最大の成果は、参加した学生自身が、教育現場で必要となる実践的指導力について具体的な経験を通して知ることができるということである。特に、「生徒を見る力」については事前の指導、インターンシップの実践、事後のリフレクションにおいて、その日に見た具体的な生徒やその活動を通してリアルに実感することができるという点で、大学内での教職課程の授業では得ることができない知であるといえよう。年間で最大4回のインターンシップではあるが、さまざまな現場の実践知について触れる機会を持つことができ、教職を目指す上での自らの課題と直面することができるということにおいて、学生にとって稀少な学びの機会である。以上の点において、文理学部が継続して実施してきた教職インターンシップは、教育実習やボランティアなどの学校体験活動とは異なる独自の教育効果をあげているといえよう。

しかし一方で、学校インターンシップは「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行う・・・」(中央教育審議会, 2015)と定義されていることに注目すると、現行の教職インターンシップは継続的なものではなく、長期間にわたる学校現場での体験活動という実施形態ではないため、教育現場の日常の継続性を学ぶことができない点が課題としてあげられる。教職に就けば、毎日が継続していくのが現場であり、その

継続性の中で育まれる生徒との関係性もある。その点については、数回の教職インターンシップでは経験できない。また、教職インターンシップは、教師に必要な実践的指導力の一部について知る機会にとどまっておらず、実践的指導力の全体的な養成については大きな課題が残っている。

そこで平成29年度、教職課程における学校インターンシップの実施に先行し、これまでの教職インターンシップの経験をもとに、その発展版としての「学校インターンシップ」を新たに考案し、試行することとした。以下に試行の概要を示す。

Ⅲ 学校インターンシップの試行

学校インターンシップは「理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である」(中央教育審議会, 2015)とされているが、実践的指導力の基礎の育成に有効にはたらく学校インターンシップは具体的にはどのようにして実施することができるのか。文理学部では教職インターンシップの経験に基づいて学校インターンシップを試行することによって、今後、教職課程の教育の一部に組み込まれることになるであろう「学校インターンシップ」の課題と展望を検討した。

1 学校インターンシップの概要

1) 試行の趣旨と目的

教職課程に位置づけられる学校インターンシップについて先行して試行することにより、あるべき学校インターンシップについて検討するための材料とする。参加学生、学部、受け入れ校、大学担当者、受け入れ校担当者、それぞれの立場から見た学校インターンシップの成果、課題をまとめ、総括をおこない、単位修得を目的とし継続的に長期間実施する際の問題点や留意すべき点について明らかにする。

2) 学校インターンシップ試行の内容

① 試行期間

平成29年10月～平成30年3月

② 試行対象学生

大学2年生1名、大学3年生3名の合計4名

③ インターンシップの形式と内容

参加学生が各々の授業などとの兼ね合いから、インターンシップが可能な曜日・時間帯を受け入れ担当者と調整して決定し、毎週一定の曜日・時間帯に継続的に学校インターンシップを実施した(週に1度、3時間程度)。おもなインターンシップの内容としては、生徒指導・授業の補助、教室環境整備、ホームルーム・清掃指導補助、個別の学習指導補助、学校行事の補助、事務作業の補助などである。学校における教師の日々の業務に関する補助を中心としており、実際の教育現場での仕事を体験できるようにした。

インターンシップ開始前には毎回、指導担当教諭からその日のインターンシップの内容や予定、生徒指導上の留意点などについて事前指導があり、その後インターンシップを開始した。また、インターンシップ中に疑問に思ったことや指導上の困難を感じたことについては随時、指導担当教諭やその他の教員に相談することができるようにした。インターンシップ実施期間中の月末には、受け入れ校担当者の教員とリフレクションの機会が設けられ、日々の指導の意味や生徒理解についての助言がなされた。

参加学生は「実習日誌(1回のインターンシップにつきA4の用紙1ページ分を書く)」にその日のインターンシップの内容、インターンシップを通して考えたこと、自分なりの課題などをまとめて受け入れ校担当者に提出することとし、その後、受け入れ校担当者がこれ読み、コメントを記して学生に返却した。実習日誌の内容をもとに、後日、リフレクションと総括(事後指導)がおこなわれた。

2 成果と課題

1) 参加学生のリフレクション

以下、今回の学校インターンシップ試行に参加した学生たちのリフレクション内容の一部を例示する。

- ①学校インターンシップに参加してみて感じたこと・考えたこと

「学校インターンシップは実際に生徒に指導する機会があり、生徒と話したり、指導したりした後で、本当にこの言い方で良かったのか、この指導で適切だったのかと振り返ることが多かった。生徒と接している中で、友達感覚になりかけてしまったことがあり、指導するときのことを考えると、生徒との距離感についてきちんと調節していかないといけないと実感した」(学生 A)。

②教職を目指すうえで今後につながると思うこと

「生徒を継続的に見ることで、生徒それぞれの状態を知り、一人ひとりに合った指導を行うことが大切だということがあらためてわかった。また、常に意識して「見る」ことにより、生徒の変化や成長をより感じるができるので、教師になった際には、常に生徒たちを見て、些細な事も見逃さず、生徒の出す信号に対応できるようになりたいと思った」(学生 B)。

③あらためて見えてきた教職を目指すうえでの自分自身の課題

「まず1つ目は、「生徒を見る力」である。今回のインターンシップでは特に意識してきたが、忘れてしまうこともあった。自分がいざ教師になったときに「生徒を見る」ことを忘れず、生徒の特徴や様子など、得た情報をしっかり生徒指導に生かせるようにしたい。教師になったときの自分自身の課題だと思った。2つ目は、教師としての振る舞いである。生徒との接し方や言葉遣い、姿勢を意識していかなければならない。教師と生徒という関係づくりが大切だとあらためて感じた」(学生 C)。

④学校インターンシップで学んだこと、参加して自分自身にとって有意義だと思ったこと

「定期的に、指導担当の先生とリフレクションをしていただいたのがとても有意義だった。リフレクションで教えていただいた視点を意識しながら、生徒や先生方の姿を見ると、これまでとは違った発見があり、新たにわかることもあった。例えば、校舎の細かい部分まで目を向けて環境を整えていると、

前回まで気づかなかった生徒の特徴を発見することができ、実感をもって教えていただいたことを自分自身で深く理解することができた」(学生 A)。

2) 受け入れ校担当者の総括

実際の現場で、学生が継続して教育活動に関わること自体に大きな意義を感じる。現場の教職員の中に混じり、目の前で起きている教育現場のあらゆる事象を実際に目にして、生徒への対応や指導を見ることは、学生たちにとってこれ以上ない学びの機会であったように感じる。

実際に目にして経験した事象について、ともに振り返りリフレクションをおこなうことにより、現実の生徒の姿、生徒指導の効果、方法など、具体的なことを通して実感をもった発見や学習につながっているのを感じた。また、毎週継続的に指導に携わることで、次回への課題や改善点を見出し、実際に試してみることもできていた。教育現場で教師として責任を負う立場につく前の段階で、学生の立場において現場の実践知を学ぶことは大変貴重なことである。学生たちが、インターンシップの回を重ねるごとに教師としての立場を理解し、体得し、自覚が高まっていく様子がうかがえた。

また、学校インターンシップの受け入れを通して、自分たちの教育活動を客観的な視点でとらえ直す機会を得ることができ、学生への指導と並行して、受け入れ側の学校組織や教師も教育のあり方について反省的な検討を加えることができた。

今回の学校インターンシップ試行では、参加学生一人ひとりに「指導担当教諭」がついて、毎回の具体的なインターンシップについての指示や指導をおこなったが、現場において指導をおこなうことができる教師の確保、担当教諭の指導への意欲の維持、受け入れ校における学校全体の理解などは、今後も課題となると感じた。

3) 大学担当者の総括

学校インターンシップ試行前には、参加学生自身が、文理学部で従来から実施している教職インターンシップとの違いや学校インターンシップの

目的や位置づけが明確であるかという不安があったが、実際には日々のインターンシップで学びを重ねることができており、継続的なインターンシップの意義についても理解できている様子がうかがえた。また、大学と受け入れ校のあいだのコミュニケーション、共通理解についても問題なく、計画通りに進めることができた。

学生たちが毎週決まった時間に実際の学校教育現場に身を置き、体験できたからこそ学べたことが沢山あるように感じる。教師という仕事について、生徒から見えない細部にわたってその仕事内容を見て、体験し、考えるきっかけを作ることができたように見受けられた。

参加学生にとっては生徒から見えない部分の仕事は、うまく行って当たり前と位置づけて考えていたようだが、今回の学校インターンシップを通じて、生徒たちが安全で、安心できる学校生活を送れることは、決して教師の当たりの仕事ではなく、教師たちの高い意識に基づく細心の注意の下で実現していることを強く感じたようである。

また、実際に生徒たちと接することで、信頼関係の下での指導という大切なことに気づいていた。総じて、授業内、学校生活全般、課外活動のすべてにおいて「気を利かせて行動すること」と「生徒の些細な変化や特徴に気付くこと」が教師という仕事の根底にあることを学んでいる様子がうかがえた。

4) 成果

学生のリフレクション内容や、受け入れ校担当者・大学担当者の総括にもみられるように、学校インターンシップの実施を通して、学生が教職についての理解を深化させ、自分自身が教育現場に立つことを想定しながら実際の指導と関わることができることには大きな意味があり、大学の理論的な学びと現場の実践知の融合の機会としてもその教育的な成果は大きい。

特に、成果をあげたのは、学生自身が学校インターンシップでの経験を振り返りと指導者からの助言により省察し、自分自身の学びを深め、その後の学びにつなげることができたという点だと考える。益川ら(2016)は、学校インターンシップ

を学生任せの学校現場体験に終わらせず、学問知と実践知をつむぐ学びへと深化させるために大学が果たす役割が重要であると述べている。その中で、大学教員が、アカデミックな知見から学生の活動を意味づけ、解釈するための指導や助言を行うことが必要であるとしている。

今回の学校インターンシップ試行においては、大学担当者が各々の学生のリフレクションや報告に随時、適切な助言を加え、次のインターンシップにつなげていくことができた点も、学生の現場での経験を有意義なものに位置づけるために大きく貢献したと言える。今回の学校インターンシップの試行においては、指導者の助言や解釈によって学習の深化が図られ、質的な裏づけを得ることができるということが分かった。

インターンシップ実施前には、教師という仕事における生徒理解が、それまでの自身の生徒時代における経験を基盤とした漫然としたものであったが、実施後には生徒理解の方法の枠組みを自覚的に形成し、それにしたがって、その時々自身の振る舞いについて省察できる知が育まれたと考えられる。さらに、今回は紙面の都合でふれられなかったが、リフレクション反省会の発表からは、そのような省察の繰り返しから、自身で形成した既存の枠組みをさまざまな状況によって変形させていくことの必要性についても気づきはじめていた。このような思考様式の芽生えは実践的には極めて重要な知といえるであろう。

5) 課題

今回の学校インターンシップ試行においては、学生・受け入れ校・大学がそれぞれに学校インターンシップの目的や意義を理解し、共有して、三位一体となって進めることができたために大きな成果を得ることができた。しかし今後においては、受け入れ校を広げ、参加学生が増えた場合に、三者の理解と協働をどのようにして構築することができるかが課題となるであろう。森下(2016a)が、学校インターンシップを立ち上げる際には、学校インターンシップに対する相互(学生・学校現場・大学)の必要性の確認を行い、各々の需要に沿う形でシステムの設定を行うことが求められると述

べている通りであろう。

また、現場体験活動にはメリットだけでなく、デメリットもあることが指摘されている。原(2016)によれば、デメリットは大きく2つあり、1つ目として学生にかかる負担の問題を挙げている。インターンシップは多くが授業以外の時間におこなわれるので、大学の授業との折り合いをつけていくことはどうしても課題となる。2つ目として専門的な知識を持たない学生を現場に関わらせることの危うさが挙げられている。原(2016)は、いじめや不登校に悩んでいた、特別な支援を要する子どもに対して「何をしてはいけないか」や「どんなことに注意を払わなければならないか」という知識を持たないまま教育現場に入るとは、子供たちの一生を左右するような取り返しのつかない事態を引き起こす恐れがあることも十分に考えに入れておかなければならない、と指摘している。さらに、油布(2013)は、教育現場を中心とする現場における学びは、人が期待するほど万全でないことが知られているとし、「実践的指導力」は、変化する社会と子どもに「対応」できる教員を養成するという目的から必要とされたが、強固な現場主義の下では、根強く存在する現場のやり方の中に回収されかねず、新たな視点での改善・解決が難しくなる可能性が高いと指摘し、現場主義の弊害について言及している。

今回の学校インターンシップ試行においては、実施曜日や時間帯についても参加学生のそれぞれと受け入れ校の事情がうまく調整されたが、学校インターンシップが本格的に始動した場合に、多くの参加学生と複数の受け入れ校の調整をうまくはかることができるかということや、学生が無理をして参加しなければならないような事態にならないかという懸念はあるだろう。また、問題や課題を抱える生徒や特別な支援が必要な生徒の指導については、受け入れ校の担当者や大学担当者の指導力、さらには学生への指導機会の確保など、克服すべき多くの課題が存在することも事実である。そして、参加した学生が、教育現場に継続的に身をおいて、学校の流れの中に吸収されてしまうことになれば、学校インターンシップはまさに現場主義の弊害そのものになってしまう。学校イ

ンターンシップが実践的指導力の養成に貢献するためには、参加学生自身が自らの経験を省察したうえで、反省的な学びができるようにしなければならない。

原(2016)は、学校インターンシップでの学生の学びが有意義なものになるためには、「大学での基礎的な学び－インターンシップ－大学での確認－教育実習」といったスパイラルな学びの構造の構築が重要であることを指摘している。大学が、どのように学校インターンシップを位置づけ、スパイラルな学びの構造を工夫していくことができるかは今後の課題となる。

その際に重要なのは、ハード面として、受け入れ校の確保や受け入れ校の学校インターンシップへの理解を得ること、学生への日常的な連絡・指導ツールの確保などが挙げられる。教育の内容面としては、インターンシップの事前・事後の指導内容の充実、大学担当者や受け入れ校の担当者の指導の質的な向上などが挙げられる。また、学校インターンシップそのものを長く継続し、維持していくこと自体にも多くの工夫と努力が必要となるであろう。

IV 今後の展望

学校教育現場の課題はまさに複雑・多様化しており、教員養成の教育においては実践的指導力や学校現場における諸課題への対応力の修得が不可欠である。「教職課程コアカリキュラム」(文部科学省, 2017)は、まさにすべての大学の教職課程において共通に修得すべき資質能力を明確化し、教員養成の全国的な水準を確保していくことがねらいとなっている。

「教職コアカリキュラム」(文部科学省, 2017)では、「教育実習(学校体験活動)」の全体目標として「一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける」と記されている。また、教育実習の一部として学校体験活動を含む場合には、「幼児、児童および生徒や学習環境等に対して適切な観察を行うとともに、学校実務に

対する補助的な役割を担うことを通して、教育実習校（園）の幼児、児童又は生徒の実態と、これを踏まえた学校経営及び教育活動の特色を理解する」、「大学で学んだ教職に関する専門的な知識・理論・技術等を、各教科や教科外活動の指導場面で実践するための基礎を修得する」ことが重視され、中でも「学級担任の役割と職務内容を实地に即して理解している」ことと、「教科指導以外の様々な活動の場面で適切に児童、生徒と関わるができる」という2点については遺漏なく達成されるようにすることとしている。

前述の通り、学校インターンシップの実施については「指導面」の環境確保と質的保証の点が当面の重要な課題となるであろう。つまり、「教職コアカリキュラム」（文部科学省、2017）に明記される目標を達成するためには、実践知に関わるメンターとしての指導者の確保が最も重要である。単に現場の教員が指導を行い、教職について日常的業務を説明し、職人的視点からの伝承を行うだけでは不十分である。現場の実践知である実践的指導力を教職志望者にどのように伝えていくのかについては、今後ますますの検討および研究が期待されるであろう。

学校インターンシップ実施の前段階として、教師の実践知である実践的指導力についての明確化が必要であり、それは言うまでもなく実践的指導力を次世代に伝え、育成していくためには不可欠である。まずは、この分野の研究の大きな進展が求められている。

森下（2016b）は、「学校インターンシップの真価は、参加学生の実践的指導力の育成だけではなく、実践知と学問知の蓄積を教員養成教育の強化・充実に向けた大学の学びのリソースとして機能させることにある」としている。「学校インターンシップ」という教員養成教育の新たな機能を考えることを通して、大学における教職についての教育全体を再考する機会とし、実践知が学問知から乖離することなく、2つの知の往還が実現できるように工夫していくことも、今後の展望として重要であると考えられる。

注

- 1) インターンシップの実施に際しては、守秘義務に関する誓約書の提出を求めている。
- 2) 本稿で検討対象となったリフレクションシートについては、事前に報告書に掲載する可能性があることを伝え、了解を得た。また、報告書の作成が確定した時点においても再度了解の確認を行なった。リフレクションシートの回収は、全てのインターンシップが終了後に行なった「インターンシップ反省会」の終了後（3月）に回収した。
- 3) リフレクションシートにおける反省内容は、「参加する前に意識したこと」「参加してみて、感じたこと、考えたこと」「教職についての理解の変化」「教職を目指す上で今後につながると思うこと」「あらためて見えてきた教職を目指す上での自分自身の課題」「学校インターンシップで学んだこと、参加して自分自身にとって有意義であったと思うこと」であった。

引用文献

- 中央教育審議会（2015）、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf
- 原清治（2016）、「学校インターンシップ参加学生のキャリア意識の育成」（田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚編著『学校インターンシップの科学』ナカニシヤ出版）, 191-209 ページ。
- 益川弘如・長谷川哲也・望月耕太（2016）、「学生の学校インターンシップ経験を活かした授業・演習 新たな学びの実現に応える教員養成大学・教職大学院の構築」（田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚編著『学校インターンシップの科学』ナカニシヤ出版）, 273-296 ページ。
- 文部科学省（2017）、「教職課程コアカリキュラム」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf
- 森下覚（2016a）、「教育臨床に関わる力の成長 ハイブリッドな集合体としての教育臨床の達成」（田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚編著『学校インターンシップの科学』ナカニシヤ出版）, 171-190 ページ。
- 森下覚（2016b）、「学校インターンシップ参加学生への省察支援 協働的省察によって達成される対話」（田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚編著『学校インターンシップの科学』ナカニシヤ出版）, 231-247 ページ。

- 土屋弥生・伊佐野龍司・鈴木理・青山清英 (2012), 「インターンシップを用いた新たな学校教育のあり方－聖パウロ学園高等学校エンカレッジコースの体育インターンシップの試み－」『桜門体育学研究』第47集(1号), 39-51 ページ。
- 土屋弥生 (2013), 「教員養成のためのインターンシップの新たな展望－教育を成立させる力の涵養のために－」『日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要』第86号, 139-149 ページ。
- 土屋弥生 (2017), 「生徒指導における身体能力としての教師の実践的指導力に関する試論」『桜門体育学研究』第52集, 35-46 ページ。
- 油布佐和子 (2013), 「教師教育改革の課題－「実践的指導力」養成の予想される帰結と大学の役割－」『教育学研究』第80巻 第4号, 78-90 ページ。